

ディズニー映画音楽における音楽ジャンルと文献調査上の諸問題（226行まで）

谷口昭弘

amekura101@yahoo.co.jp

ディズニーのアニメーション映画は幅広い年齢層に親しまれ、『三匹の子ぶた』や『白雪姫』、『美女と野獣』や『アラジン』など、興行成績的にも、また批評家の評価も非常に高いものがあります。またそんなディズニーのアニメ映画で使われている音楽の良さも常々語り継がれてきました。

そんなディズニー映画は1937年封切りの『白雪姫』以来の諸作について、漠然とミュージカルに例えられています。これがどのくらい妥当なものかという論議はおいておいて、この『白雪姫』の音楽のフォーマットが確立する経緯を調べてみることは、ディズニー映画の本質を考えるために必要なことと思われまます。というのも、例えば、日本でも比較的よく知られている『ボックス・バニー』や『トムとジェリー』といった短編アニメーションが、日本のテレビ・アニメと比較して、非常に音楽を重視していることは分かっても、ディズニーのように、それらを「ミュージカル」と考えることはあまりなく、ディズニーのアニメがアメリカでも特異な位置を持っていることが考えられるからです。

今回はそういった『白雪姫』以前に作られた大量の『ミッキー・マウス』の短編映画シリーズを中心に、そこに使われている音楽を調査し、それが『白雪姫』以降の音楽にどのようにつながっていくのかを考えてみたいと思います。その前に、これまで私が研究を行ってきた過程で感じた、ディズニー映画音楽の調査上の問題点、特に文献調査において感じた問題点についてもご紹介させていただきたいと考えています。

まず、ディズニーの映画音楽というのは、これほど人気のある題材である割に、学問的調査に耐えうるだけの文献は非常に少ないといえます。日本語でディズニーの本といえますと、ウォルト・ディズニーの伝記が数点で、映画やテーマパークにおける顧客サービスやビジネス戦略といったものがほとんどです。一方で映画作品そのものを考えるものは少なく、テーマパークや映画のファン向きに刊行されている『ディズニーファン』という雑誌のコーナーにディズニー・ソングの解説があり、そして映画ライターの柳生すみまるという人が書いている様々な連載記事--これは歌や映画だけに限らないのですが--これらのみが、骨のある内容のものといえるでしょう。ただしこれにしてもジャーナリズムの文章ですから、引用文献の詳細が書かれている訳ではありません。

そもそも漫画映画、英語ではカートゥーンと申しますので、この発表ではこのカートゥーンという言葉を使いますが、この音楽が学問的研究対象になったのは比較的最近のことで、Daniel Goldmarkという、現在はアラバマ州の大学で教えている学者がUCLAで書いた博士論文が、その最初と申せましょう。そのゴールドマークという人の論文が本となったのが、今年カリフォルニア大学出版局から刊行されたTunes for 'Tunesという本です(文献につ

いては、お手持ちのレジユメの最後に文献一覧がございます)。ディズニーのことはほとんど触れられていませんが、ワーナーやMGMのカートゥーンと音楽についての博士論文がもとになっていて、今後こういった方向で学問研究が進むということを予感させる内容です。ディズニー最初のスタジオ作曲家でその後ワーナーへ映った作曲家カール・ストーリング、この人はカートゥーン音楽のスタイルを確立した人ですね、そしてトムとジェリーの音楽でも有名なスコット・ブラッドリー、この2人について、その経歴と作品に関する考察があります。その他ジャズとクラシックという2つのジャンルの音楽がカートゥーンにどのように使われていたか、どういったシチュエーションで使われていたかを考察し章があります。

このTunes for 'Toonesが発刊された数年前、2002年には同じくゴールドマークが編集した本にThe Cartoon Music Bookというのがございます。こちらは音楽の専門家でない人も書いており、その内容は玉石混交です。しかしディズニーの初期短編映画の音楽を担当したカール・ストーリングという人のインタビューが収録されており、貴重なものといえます。これらの本はカートゥーン音楽を研究するための出発点として考えられます。

一方ディズニーに関する本は、例え本国アメリカで出版されたものでも、多くがディズニー社がその内容についてかなりコミットするということがあるようで、批判的視点を持つことが難しいという問題があります。これはポピュラー音楽について書かれた文章が、ジャーナリズムの名を借りたプロモーションであることが多いという問題をそのまま踏襲しているといえます。

そういった中で、音楽に特化せず、ディズニー映画全般を扱った書籍があります。Leonard Martinという人の書いたDisney Filmsはディズニー公式の出版会社から出ているため、限界はありますが、一応批判的な意見も書かれており良心的でしょう。ただこの本はカートゥーンだけでなく、ディズニー社が製作した実写映画やテレビ番組もすべて扱っているため、どうしても初期短編だけを調べるには物足りない内容になってしまいます。その他カートゥーン・バフ、日本流というアニメ・マニアというのでしょうか、そういう人574ページもあるカートゥーン史の本を出しています。Michael BarrierのHollywood Cartoonsで、オックスフォード大学出版局から発行されています。25年以上(Michael Barrier ホームページ参照 <<http://www.maichaelbarrier.com>>)、あちこちに存在するカートゥーン・スタジオのアーカイヴ資料や自ら行ったスタッフとのインタビューを多用して書かれた力作で、その中には音楽についての言及もなされています。このバリアーという人、実は自ら雑誌の創始・編集にも携わりFunnyworldという雑誌もだしました。この中の特集記事にロス・ケア(Ross Care)という、やはりこれもライターだと思うのですが、ディズニー短編の作曲家とのインタビューをもとにした雑誌記事を書いています。

文献表には2つの雑誌記事も挙げてありますが、いずれも作曲家へのインタビューを起したものが中心となっています。ややそのインタビューからの引用が長過ぎる嫌いがありますが、引用するための資料としての価値はあるでしょう。

もちろんディズニー映画研究の一番大切な資料は映画そのものです。ディズニー映画の

ほとんどは現在DVDで入手できるのですが、そのほとんどは『白雪姫』以降の長編映画で、それよりも前の短編映画は長編映画のDVDにおまけとして数点収められているだけでした。状況が変わったのは、実はここ2・3年のことです。アメリカのディズニー社から有名な長編映画以外の、歴史的に重要な作品を集めたWalt Disney Treasuresというシリーズがリリースされはじめまして、今回に発表の時に使うミッキーマウス全盛期の白黒の短編は、そのほとんどすべてが観られるようになりました。

さて、ディズニーの短編カートゥーンは、その一つが約7～8分とはいえ、映画の立派な1ジャンルということが言えます。そして映画における音楽の大切さについては、ここでくどくどと説明する必要はないでしょう。ただウォルト・ディズニーが始めたカートゥーンは、商業ベースで初めて進められた「トーキー・アニメーション」でした。もちろんサイレント映画時代にも、各映画館でライブ演奏を行う楽隊がいた訳ですが、トーキーにおいては、登場人物が音を出すということが画期的であったと思われます。そしてカートゥーンの場合は、コミカルな絵として描かれたキャラクターが声や音を発するのですから、それは新奇さ、ノヴェルティーとしての面白さでもありました。

ではそんなディズニー映画において、どんな音楽が使われていたのか、もちろんディズニー所属の作曲家というのがいた訳なのですが、実はミッキーマウスの白黒時代のというのは、既成の曲をそのまま持ち込むことも少なくありませんでした。お手持ちの資料の2をごらんください。これはミッキーマウスの白黒時代において使われた音楽を分かる範囲でできるだけ多く集めたものです。ポピュラー音楽については私の知識が不足しているということもあって、確かな調査になっていないのですが(もし調査に協力していただけるのでしたらお知らせください)、南北戦争の歌、愛国歌、民謡、子どもの歌、クラシックがかなり多く使われていることが分かります。ディズニー初のスタジオ・コンポーザーであったカール・ストーリングという人も、ディズニー映画においては、こういったジャンルの曲が多く使われていたことを証言しています。資料3に彼の発言が引用させていただいたのですが、ストーリングはマイケル・バリアーのインタビューに答えてこのように言っています。マイケル・バリアー「あなたの音楽はディズニーとアイワークス [谷口注:アニメーター] のスタジオのものとワーナー・スタジオのものでかなり違っていませんか?」ストーリング「はい。なぜならワーナーにおいては、ポピュラー音楽を使うことができたからです。ディズニーでは19世紀へ、クラシック音楽へ、《ケンタッキーのわが家》へ戻らねばなりませんでしたから。

では、なぜウォルトはこのような古めかしい音楽を使ったのでしょうか。まず一つにはウォルト・ディズニーが初期のカートゥーンの舞台設定をどこにおいたかによります。1929年の『ミッキーの畑仕事』、『裏庭の戦い』、1930年の『ミッキーの幌馬車時代』など、都会ではなく片田舎の風景、あるいは古き良きアメリカに対するノスタルジックな回顧という主題を多く扱っているのが特徴になっています。

しかし、それだけではありません。もっと実利的な問題に、著作権使用料というものがありました。19世紀のクラシックのほとんどは、すでに著作権が切れていたため、曲を使うにあ

たって使用料を払う必要がなかったからです。実はストーリーリングはその後ワーナーに移ってポピュラー音楽を頻繁に使うようになるのですが、その理由はワーナーがポピュラー音楽についてはかなり多くの曲を自社の財産として持っていたので、コストについては心配しなくても良かったという背景があります。

ウォルトがクラシックを使う理由のもう一つには、ディズニー独自の色が出るということもありました。つまりワーナーなど他者では観客に向けて多くのポピュラー音楽をおしげもなくつかっていたのを逆手にとって、ディズニーはわざわざクラシックっぽい音楽を多用することにより、少なくとも見せ掛け上「高尚さ」を自社製品の「売り」とすることができたということがありました。その最も顕著な例が例が1940年封切りの『ファンタジア』で、ウォルト・ディズニーはこの『ファンタジア』製作最中に、自分のクラシックに対する知識が足りないことを感じとり、わざわざハリウッド・ボールという、ロサンゼルス郊外で野外コンサートを行う場所のボックス・シートの会員にさえなりました。ほとんどのコンサートでは寝ていたということでもあったようですが。

一方、私が確認できたのはわずかですが、資料2の(4)に分類したポピュラー音楽も使用されています。この中には《セントルイス・ブルース》、《メープルリーフ・ラグ》など、ブルースやラグタイムが使われています。しかし基本的にディズニーのカートゥーンにおいて、作曲家は先程述べた経費の理由で著作権のある楽曲を避けるように言われるそうですが、カール・ストーリーングという作曲家は、ポピュラー・ソングを真似して曲を書くようにという指示を受けたことがあるそうです。そのような実例が、1934年に作られた、これはミッキーの登場しないカートゥーン・シリーズ、「シリー・シンフォニー」の1作品『うさぎとかめ』にあります。作曲者はフランク・チャーチルというのだそうですが、《私を野球に連れてって Take Me Out to the Ball Game》(アルバート・フォン・ティルツァーとジャック・ノースワース)のスタイルを使った歌が現れます。時間があったら、この聴き比べもやってみたいと思います。

一つ変わったカテゴリーに(5)のエキゾチシズムというのをここに入れました。曲としては2つしかないのですが、このうちの最初の《The Streets of Cairo》というのが、5つの映画に登場し、当時流行していたと感じさせるので、あえて別項目にしてみました。ミッキーの幌馬車時代に至っては、今日アメリカ先住民と呼ばれるインディアンまでがこの曲と一緒に踊っている場面があります。調べてみたところ(<http://www.shira.net/streets-of-cairo.htm>)、この曲はアメリカでは19世紀頃から「蛇使いの音楽」として知られているようで、後ほどミッキーの踊っている場面もご覧いただけます。タップダンスもやたら多くの映画に現れるので、音楽のジャンルかどうかは別として、やはりここに挙げておきました。

次に、こらの既成曲を含め、ディズニー・カートゥーンで音楽どのように使われていたのかを考えたいと思います。まずは「アンダースコア」、つまりバックグラウンド・ミュージックです。特定のムードを醸し出したり、状況設定をサポートする音楽で、これはあらゆる映画に幅広く使われています。2番目の「ミッキーマウジング」はハリウッド映画業界に広く使われている言葉です。みなさん『トムとジェリー』の追いかけっこをする場面は想像できると思いますが、

例えば手が上がると音もスライドして「ニュー」っという感じであがる、あるいは階段から転げ落ちるのに合わせて音がボンボンと下がっていく、そういった、細かい動作に細かくすべて音をつけるスタイルのことを「ミッキーマウジング」と申します。じつはこういう、いかにもマンガらしい音の付け方を始めたのはミッキーマウスのシリーズだったことから、こういう用語が定着したのです。

さて、こういったアンダースコアリングとミッキーマウジングという基礎がありまして、その他に、初期のミッキーマウスとシリー・シンフォニーのシリーズには、それ特有のフォーマットがありました。それが次に挙げた分類、すなわちコンサート・ミュージック、ダンス・ミュージック、オペレッタの3つです。これらについては実際にご覧いただいた方が早いと思いますので、早速実例を観ていただきます。コンサート形式として取り上げたのは『ミッキーのオペラ見物』という1929年の映画。資料の4に簡単な解説を書いておりますので、これを参考にしながら、ちょっと観てみましょう。

[DVD視聴:ミッキーのオペラ見物]

次はダンス・ミュージックの例を見ましょう。1932年の「ミッキーのウーピー・パーティー」です。資料5に簡単な解説があります。

[DVD視聴:ミッキーのウーピー・パーティー]

さてこのような音楽演奏の風景、踊りの風景をメインにした短編映画の多いのも初期ディズニーの特徴です。演奏される場所もステージだけでなく、ミッキーやミニーの家だったりします。

もちろんストーリーのあるカートゥーンもあります。そういう例として1930年の『ミッキーのゴリラ騒動』というのを次に見ましょう(なお、日本語字幕がありませんので、ビデオには英語キャプションも表示させました)。資料6に簡単な解説があります。

[DVD視聴:ミッキーのゴリラ騒動]

動物園から抜け出したゴリラがミニーを襲うという筋書きがこのカートゥーンにはありますが、一方でミニーがピアノを弾きながら、電話でそれを聴くミッキーに長々と歌を歌うというのは、やはりこれまでのコンサートやダンス・タイプの流れがここにもあることが分かります。しかもミニーの歌というのは、ゴリラが襲ってくるのとは何も関係がなく、せいぜいミッキーとミニーは仲良し、という位のものです、つまりこれはミッキーとミニーが人気キャラクターであるがゆえに成り立つ場面という風に考えることも可能かと思われまふ。

一方で、1933年、34年辺りになると、こういった、割合に単純な筋のアニメーションに限界

が見え始めます。ミッキーマウスは人気がありましたが、このキャラクターの持つ強い個性がありません。物語を支えるキャラクターとしては弱いという指摘がなされるようになりました。プルートやグーフィー、ドナルドダックというキャラクターがミッキーとともに出るようになるのには、そのような背景があります。またドタバタギャグだけで短編の7・8分をつなぐというのにも、そろそろ限界が見えてきたようで、ミッキーの登場するアニメには、より多彩な感情表現の含まれたアニメーションも登場するようになります。そのような例として、次に1933年の『ミッキーの愛犬プルート』をご覧ください。

[DVD視聴:ミッキーの愛犬プルート]

この短編で使われた音楽はコンサートでの演奏やダンスというよりは、ムードや感情に重点を置いたアンダースコア型で、ギャグの面白さはミッキーマウジング、つまりアクションと音の精密なシンクロで出来ています。ミニーは子守唄を歌いますが、これはさっきの「ゴリラ騒動」のとは違って、物語的にも意味のある引用となっています。マイケル・バリアーという人の調査によりますと、この頃、ウォルト・ディズニー自信、単に面白おかしさだけでなく、登場するキャラクターの性格・感情表現をもっとするというメモを残しているそうです。次々とギャグを連発するだけではなく、もっと多彩な感情をカートゥーン一作に盛り込むことが求められたのですね。

音楽的にも手の込んだものが作られるようになります。いよいよオペレッタ形式のものが登場するのです。オペレッタ形式の特徴は、歌が既成曲でなく、物語に強く結びついたオリジナルの楽曲であること、また登場人物に応じて合唱・独唱を交えること、オーケストラ音楽と歌の滑らかな継続など、作曲技法の冴えも要求されてきます。またクラシックだけでなく、後半にはチャールストンも登場し、音楽ジャンルも自然に超えられています。お配りした資料、資料8には『ミッキーの騎士道』の簡単な解説が、次のページに移って資料9には、この映画の全体の概要、ならびに歌の歌詞やセリフを書きだしました。DVDに収録されている英語キャプションをそのままここでは使っています。これを見ると分かる通り、歌の歌詞には韻を踏んでいる箇所もありますし、レチタティーヴォ風の箇所もあることが分かります。ではビデオをご覧ください。

[DVD視聴:ミッキーの騎士道]

ディズニーのカートゥーンでは1930年代、クラシックや愛唱歌の既成曲を素材にしながら作品を作りながらも、次第に多彩な表現が求められるようになると、音楽構成も込み入ったようになり、やがては物語に直結するような歌の必要性にも迫られてきます。ウォルト・ディズニーが長編カートゥーンの製作を考え始めたのは1935年頃のようなのですが、今日観て来たミッキーマウス・カートゥーンの音楽から引き継がれてきた要素もたくさんあります。アン

ダースコアは映画音楽の基本ですが、ミッキーマウジングは、小人たちが2階に寝ている不審な人物(これは白雪姫なのですが)を見に行く場面で使われています。オペレッタ／ミュージカル形式については、みなさんもよくご存じですね。ただし、アラン・メンケンが活躍する1989年の『リトル・マーメイド』以降のアニメでは、もっと歌とスコアとの密接な関係が見られます。これについてはいずれ機会があればお話ししたいところです。そして何と言ってもオリジナル・ソングを積極的に使おうという意志が見られること。ディズニー・カートゥーンにおいては歌は物語の根幹を為しております。現在長編を作るにしても、まずは挿入歌を作曲し録音するということですから、歌の重要性、そしてミュージカルのフォーマットはすでに短編の時代から作られていたことが分かります。今回ご紹介できなかったミッキーマウスの登場しない別の、音楽と幻想的な映像で見せる「シリー・シンフォニー」には有名な『三匹の子ぶた』、そういったところにもオペレッタ・アニメの源流があるようです。

今回の私の発表は以上です。どうもありがとうございました。